

# 青年期における多元的な自己と アイデンティティ形成に関する研究の動向と展望

木谷 智子・岡本 祐子  
(2015年10月5日受理)

Review and Considerations for Research on Self-Pluralism and  
Identity Formation in Adolescence

Tomoko Kitani and Yuko Okamoto

**Abstract:** This study reviewed the trends of self-pluralism and identity formation studies. Recently, the study of self-pluralism has gained popularity and some researchers have suggested that self-pluralism has increased in today's youth. Youth with self-pluralism easily adapted to various scenarios of the society. In Erikson's identity theory, self-pluralism causes conflict. Intrinsically, self-pluralism was regarded as the opposite of identity. However, modern youth who are classified as having self-pluralism do not feel conflicted. In other words, the modern youth seem to have both a sense of identity and self-pluralism. These youth appear to have multiple identities. The purpose of this study is to consider multiple identities from various perspectives. Changes in society and Japanese culture are associated with multiple identities. The identity formation of modern Japanese youth cannot be explained by Erikson's identity theory. Therefore it is necessary to examine identity and self-pluralism as a variety of forming processes in future studies.

Key words: Identity, Self-pluralism, Adolescence, Review

キーワード：アイデンティティ、多元的自己、青年期、レビュー

## 1. はじめに

近年、状況依存的で、多元的な自己を持つという青年が多く指摘されている。特に2000年以降、学生相談の現場において、多元的な自己を持つ学生の増加を指摘する論文が増えている(成田, 2001; 高石, 2009; 川上, 2013)。高石(2009)は、学生相談に来談する学生の変化を概観し、1960年代~1980年代前半までに学生時代を過ごした世代は、自己を一貫性のある自己に統合することを理想としていたのに対し、1980年代末以降に学生時代を過ごす世代のこのころの構造は、自己の統合性が相対的に希薄で、このころの中の混じると都合の悪い要素は衝立で仕切るように切り離し(解離)、ばらばらのまま併存させているという図式で表

されるという、人格構造の変化を述べている。また成田(2001)は、近年の大学生に“母親バージョン”や“友人バージョン”など、相手に応じて異なる自己を表現する、状況依存的で多元的なあり方を見出している。これらの指摘は学生相談に来る学生の特徴として示されているが、一般的な大学生の特徴としても見られている。

社会学の分野でも、2000年頃から自己の多元性を指摘するものが多い(浅野, 1999; 辻, 2004; 岩田, 2006)。浅野(1999)は、若者の友人関係を調査し、そこから「相手やつきあいの程度に応じて関係の在り方が変わっていく」という在り方を見出した。そして彼らにとっての自己とは「ひとつの自己イメージによってとはとらえきれないものであり、場面ごとに出て

くるいくつもの自分のどれもがそれぞれに自分らしいのである」とし、「複数の自分のどれもが本当の自分である」という多元的な自己の在り方を見出している。

青年期において多元的な自己を持つことにはどのような意味があるのだろうか。また、近年において多元的な自己を持つ青年が何故増加しているのだろうか。本論文では、青年期の理解に、従来から広く使用されてきた Erikson のアイデンティティ理論の枠組みの中で、現代の青年が持つ多元性がどのように位置づけられるのかを整理し、多元的な自己の増加を社会的特徴と関連づけながら論考することを目的とする。

## 2. アイデンティティ論における自己の多元性

アイデンティティとは、Erikson (1950) が青年期の発達課題として挙げたものであり、斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が周りから見られている社会的な自分と一致するという感覚 (谷, 2001) とされている。

また、アイデンティティ形成の本質となるのは、「私は何者か」という問いに答えることであるとされている (Adams, 1976)。青年期には、青年はさまざまな危機に直面し、「私は何者か」というアイデンティティの問いを投げかけられることになる。

青年期において最も大きな危機は職業選択における危機である (Erikson, 1950)。自分で職業を選択する際には、「自分が何をしたいのか」「自分は何者なのか」というアイデンティティについての問いに直面することになる。職業選択以外にも、社会と自分が関わる場所の変化や増加により、自分自身への差異や違和感に気づくことも、アイデンティティの危機となる (小沢, 2004)。アイデンティティの問いに対する答えを模索する際には、「これまでのアイデンティティのすべての要素を最終的に集合し、そして規準から外れたものを放棄する作業がある (Erikson, 1959)」とされている。つまり、青年期におけるアイデンティティ形成は、児童期まで、親や教師といった重要な他者の価値基準を通して構築してきた同一化群を、自らの価値基準で再構築していく必要に迫られる (溝上, 2008)。しかしその作業は簡単なものではなく、一時的に自分が何者か分からなくなる。これを Erikson (1959) はアイデンティティの拡散、あるいは役割拡散とした。役割拡散は、アイデンティティ達成の対概念として用いられている。青年は、アイデンティティ拡散の混乱を抜け出すために、「思い切って自分でやってみる」といった形で社会的な遊びを通した役割実験を行うことにな

る (Erikson, 1959)。役割実験の場は、学業、サークル、ボランティア等さまざまなものがあげられている (小澤, 2004・水間, 2006)。活動場所における価値基準や、与えられる役割は異なるが、それらの中で自らに合ったものを主体的に取捨選択していくことがアイデンティティの確立には必要とされた (Erikson, 1950)。

役割実験を行うためには、一時的にそれぞれの役割に同一化する必要があるために、青年は一時的に多様な自己を持つことになる。そのため、青年期には自己は複雑に分化し、自己が特定の場面や対人関係と結びついて把握されやすくなる (Coleman & Hendry, 1999)。しかし、このように場面で異なる自己は、葛藤を引き起こし、抑うつ、自尊心の低さ、神経症傾向などのアイデンティティ拡散の症状と結びつくとされている (Block, 1961; Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P., 1993)。そのため、Erikson のアイデンティティ論においては、自己の多元性は一時的なものであり、それらは自己の混乱を引き起こすものであるため、いずれ統合へ向かうとされた。

## 3. 多元的アイデンティティ

しかし、文頭に述べたような現代青年の持つ多面性は、Erikson が述べたような役割実験における一時的な在り方とは異なる。大きく異なるのは、役割において自分が異なることに対して葛藤を抱かず、「どれもがどれも本当の自分らしい (浅野, 1999)」と複数の自分を並列させている点であろう。このような特徴を説明するために、辻 (2004) は従来から言われてきたような自我構造に対し、新たな自我構造を示している。辻 (2004) が示した自我構造を Figure 1 に示す。

Figure 1 (a) のように一元的な自我構造を想定している場合は、役割において自己が異なることは「どちらが本当の自分なのか」という混乱をきたし、自己の多元性はアイデンティティの拡散状態を意味することに繋がるだろう。しかし、Figure 1 (b) のような自我構造においては、場面によって多面的な自己を持ったとしてもそれがすべて本当の自分であることが可能となるため、葛藤や混乱が生じることはない。辻 (2004) はこのような自我構造から「多元的アイデンティティ」という在り方を示した。多元的アイデンティティは「場面において異なる自己をもつこと、明瞭な自己意識をもつこと」と定義される。「多元的アイデンティティ」は自己の不明確感を持たない点で、従来言われていたようなアイデンティティの拡散状態とは異なるものであるとされている。辻 (2004) は質問調査

を行い、アイデンティティを、「不定型」「多元型」「一元型」に分類した。その結果は「不定型」が49.9%「多元型」が35.8%「一元型」が14.3%になっている。

そして、辻 (2004) はそれぞれのアイデンティティ類型と親子・友人関係を調べたところ、多元的アイデンティティを持つものは、対人関係、特に親子関係における満足度や被理解感、信頼感が、一元型と同程度かそれ以上に高いことが示された。

また、岩田 (2006) は、辻 (2004) のモデルに新たに「戦略性」「仮面性」という2点を加え、三段階で類型を行っている。それぞれの類型の特徴を調べた結果、全体を見ると多元的な自己は、自己拡散的な意識が強く、自己一貫性志向が弱いことが示されたが、「戦略性」と「仮面性」を持たない「素顔複数型」は「一元的自己」にかなり近い傾向を示すことが示された。また、「道徳・規範意識」、「社会意識」、「生活意識」、「友達の付き合い方」などの社会適応との関連を見ると、「素顔複数化型」はすべてにおいて「一元的自己」と同様、もしくはそれ以上に高い点数を示し、問題となるような規範意識や社会意識を持っていないことが示された。多元的アイデンティティの定義を、浅野(1999)が述べたような「複数の自己を持つものの、どれもが自分である」という在り方とすると、素顔複数化型は多元的アイデンティティと同義であると考えられる。このような点から、岩田 (2006) は多元的アイデンティティ (素顔複数化) のような在り方は、現代を生きるための在り方として肯定的に捉えている。

#### 4. 社会的変化と自己の多面性

多元的な自己の在り方は現在の社会に適した在り方とされているように (辻, 2004, 岩田, 2006), 多元的な自己に注目が集まるようになった背景には社会的

な変化が大きく影響していると考えられる。アイデンティティは社会的状況の変化と密接に結びついている感覚であり (Erikson,1959) その変化によって形成プロセスも変わり得る (溝上, 2008)。とりわけ、1990年代以降の社会状況の変化は非常に大きく、その変化は青年のアイデンティティ形成に大きく影響を与えていると考えられている (畑野, 2010)。

消費社会になるにつれて、個人に与えられる役割は増加する。例えば、1人の個人に対して「息子としての自分」「学生としての自分」「テニスサークルのメンバーとしての自分」というように多様な自己が含まれることにより、自己は多元的なものにならざるを得なくなる。Gargen (1991) はこのように、1人が多様な役割を持つことを「飽和した自己」として述べており、消費社会がもたらす多様な役割は、良くも悪くも自己の多元化に影響を与えていると考えている。そしてこのような多様な役割を生きる人間にとって、自己は他者との関係性の中でのみ生じ、関係性の中で構築されるとされている (Gargen,1991)。また、村瀬 (1999) は、みんなが一同に乗るプレートは消失し、結果として人は自分だけの、ないしは自分を含む小さなコミュニティのプレートをいくつもつくり出しながら生きていかなければならなくなっていると指摘し、自己が関わる場所の増加だけでなく、自己が関わる場の分化を指摘している。自己が関わる場所や役割の増加と分化が、自己の多元化に影響していると考えられる。また、社会学者の Lifton (1969) は社会が消費社会へと変化していくにつれて複数の自己を持つプロテウスの人間が増加することを示している。プロテウスとは、ギリシャ神話に出てくる変幻自在に変化する老人のことであり、場面に応じて自分を変化させるような在り方を示したものである。小此木 (1977) は、モラトリウムを謳歌する青年の1群として、プロテウスの人間 (同一性を求めず、何者にでもなれる可能性を残して

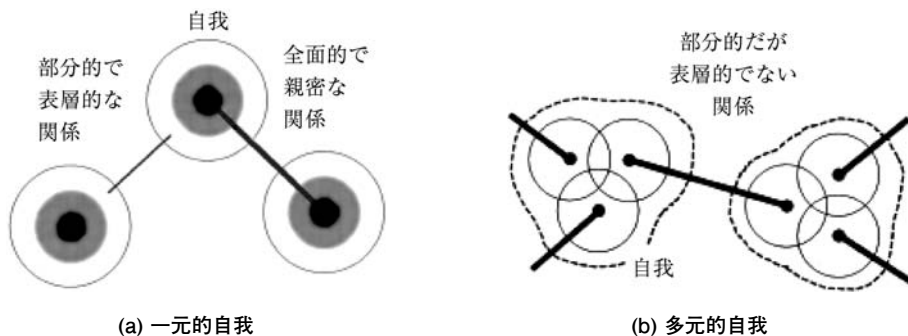


Figure 1. 自我構成の2つの模式図 (辻, 2004)

おく)を挙げており、「今やこの人間が現代の適合者になろうとして、いやむしろ、プロテウスの人間としての資質が無ければとてもこの変動社会を生き抜いてゆくことは出来ない」と述べている。実際の調査においても、消費社会的な特徴を持つほど、自己を多元的なものとして捉えやすいということが示されており(Dunn, T., & Castro, A., 2012), 現代社会が自己の多元化には大きく影響していると考えられる。

## 5. 自己の多元性・変動性の研究

上記に述べたように、社会的な変化に合わせて多元的な自己を持つ青年が増えてきたと考えられる。それでは、多元的な自己を持つことにどのような意味があるのであろうか。自己の多元性に焦点を当てた研究について概観する。

青年期において、自己の多元性・変動性について焦点を当てた研究は多く行われており、先行研究についてのレビューも行われている(安達, 2009; 渋川, 2010)。自己の多元性や変動性は、多様な概念や測定方法があるが(安達, 2009), 今回は役割における自己の変化について論じているため、役割における自己の変化に焦点を当てた研究である、自己分化度(Self-concept differentiation, 以下SCD)の研究(Donahue, et al., 1993)と、自己複雑性(Self-complexity, 以下SC)の研究(Linville, 1985, 1987)を取り上げる。

まず、Block (1961)は、場面や役割に応じた自己の変化を測定し、役割における自己概念の変化の度合いが大きいほど、不適応を引き起こすことを示している。Block (1961)は、役割間で自己が変化することを「役割変動性(role variability)」とし、アイデンティティの核の無さを示すと考えた。そして、Donahue, et al. (1993)は、Block (1961)の研究を基にSCDモデルを作成している。Donahue, et al. (1993)は、多様な役割における自己概念の分化程度によってSCDを測定している。SCDの高さは、役割において自己が変化していることを指し、SCDの高さが、自尊心の低さ、抑うつの高さ、神経症傾向と関連することを示している。

一方で自己複雑性研究は自己の多面性のポジティブな側面に焦点を当てた研究である。Linvilleは自己のSCモデル(Linville, 1985, 1987)においては、自己の多面性はwell-beingの高さと関連するとされている。SCは「自己を持つ側面の数(以下、自己側面)」と、その側面における「自己が分化している程度」から定義される。「自己側面」とは自分自身を認知するための側面のことであり、「自己が分化している程度」は、

各側面間での自己概念がどの程度類似しているかで測定される。SCは自己側面が多く、更にその側面間で自己が分化しているほど高くなる。例えば「テニスサークルのメンバーの自分」、「友人といる自分」、「恋人といる自分」という3つの自己側面を持ち、「テニスサークルのメンバーの自分」は“活発”だが、「友人といる自分」は“おしゃべり”, さらに「恋人といる自分」は“もの静か”, というように側面間の認知が異なる者は、「友人といる自分」と「恋人といる自分」という2つの側面しかもたず、「友人といる自分」も「恋人といる自分」はどちらも“おしゃべり”という一貫した認知を持つ者に比べてSCは高くなる。Linville (1985, 1987)は、SCが高いほど否定的感情は他の側面に波及せず、ストレスイベントから生じる抑うつなどの否定的感情に対して緩衝効果を持つとしている。そして実際にSCの高い人は、低い人に比べてストレスイベント後の抑うつ感情が低いことが示されている(Linville, 1987; Smith & Cohen, 1993)。

これらの先行研究を概観し、メタ分析を行ったRafaeli-Mor & Steinberg (2002)によれば、自己概念の多面性がストレスの緩衝効果を持つのは、ストレス状況下においてであり、ストレスの無い状況ではわずかではあるが、well-beingにネガティブな影響をもたらすことが示されている。このことから、ストレスイベントから生じる抑うつ感情に対する緩衝効果(Linville, 1985, 1987)のように、外的な出来事から受ける否定的感情に対しては、自己概念の多面性は肯定的な影響を持ち、一方で、アイデンティティのなさのように(Block, 1961), 長期的で、自己そのものの問題から生じる抑うつ感情に対しては否定的な影響を持つと考えられる。

つまり、アイデンティティの問題のように、自己から派生する問題に関しては自己の多面性はネガティブな影響を持つが、外的な要因から受ける影響に対してはポジティブな影響を持つと考えられる。

消費社会において自己が多元的なものになっているとされているのは、外的なストレスを緩和出来ないことによるストレスが、内的な自己を統合出来ないことによるストレスを上回ったためとも考えられる。つまり、Eriksonが述べたような、複数の役割による葛藤や混乱が生じていても、社会的な適応のために多元的な自己を形成している可能性も考えられる。

## 6. 日本文化の影響

上記に述べたような、自己を統合出来ないことによるストレスは日本の研究においてはほとんど見られて

いない。日本においては上記の先行研究と異なる結果が得られている。田島 (2010) では、SCD の高さ と抑うつ・不安との関連は示されなかった。また、ストレス状況下以外では、SC もネガティブな影響を持つとされたが (Rafaeli-Mor & Steinberg 2002), 川人・大塚 (2012) の研究においては、SC の高さ が主観的幸福感や人生満足度の高さ と関連した。このような差が見られた原因として、日本においては、関係性において自己が変化することを当然と考えているものが多く (佐久間・無藤, 2003), そのため変化に対して不安を感じにくいということが挙げられる。日本人の特徴として、他者関係に敏感で、周囲の意向に合わせて行動する傾向が強いことが挙げられる。そのような特徴のため、構造的な強さを持たないアイデンティティが形成される (鏞, 1994)。Markus & Kitayama (1991) は、文化的自己観として、西洋文化に典型的な相互独立的自己観 (independent construal of self) と日本を含むアジア文化に典型的な相互協調的自己観 (interdependent construal of self) を挙げている。それらの図を Figure 2 に示す。西洋では自己を他者とは切り離れた独自のものとして捉えるが、アジアでは、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える。相手との関係を保つために自己は柔軟に変化するものであると考えられている (Markus

& Kitayama,1991)。このような自己の捉え方は、Gergen (1991) が、消費社会的において「自己は他者との関係性の中でのみ生じ、関係性の中で構築される」と述べたことと類似している。小此木 (1977) も消費社会が自己形成に与える影響を述べていると、日本文化的な特徴と似てくると述べている。

日本は元々消費社会と類似した文化を持っており、他者に合わせて自己を変化させることに対する抵抗が少ないと考えられる。そのため、役割の多様化によって、自己の多元化が進んだとしても、西洋文化にくらべて、自己の多元性を受け入れやすいと考えられる。

## 7. 現在社会におけるアイデンティティ形成

上記では、現代青年の特徴としての多元性を従来のアイデンティティ論との比較と、社会的文脈の中から概観してきた。現在青年の特徴として指摘されている自己の多元性や、多元的アイデンティティ (辻, 2004) という在り方は、自己間の葛藤を引き起こしていない点で Erikson のアイデンティティ論では説明の難しい、新たなアイデンティティの形と捉えることも可能であろう。

アイデンティティ論において、自己の多元性はしばしばアイデンティティの拡散状態と捉えられる (Block, 1961 ; Donahue, et al., 1993)。しかし、現在の社会に適応するためには多元的な自己を持つことが求められる。そのため、多様化した社会の中で、言い換えれば多様な役割の中でどうアイデンティティを形成していくかが重要となり、多元性とアイデンティティの統合をどう結び付けて理解していくかが重要となると思われる。辻 (2004) が述べたような多元的アイデンティティという概念は、「本当の自分が複数ある」という形で双方の概念を包括した考え方の1つであると思われる。

アイデンティティは社会の中で形成されるものであるため (Erikson,1959), 社会の変化に合わせて、アイデンティティ形成の在り方も変化していくと思われる。今後のアイデンティティ研究においては、アイデンティティのプロセスとして1つの共通項を見出すのではなく、多様な道筋を示すことが重要となるとと思われる。例えば、畑野 (2010) は、領域が多様化した現在においては、自分に必要な領域を主体的に選び取っていく必要があると述べている。また、溝上 (2008) は、現代のような複雑化した社会におけるアイデンティティの形成を2重プロセスで説明している。第一のプロセスは特定領域における自己定義の形

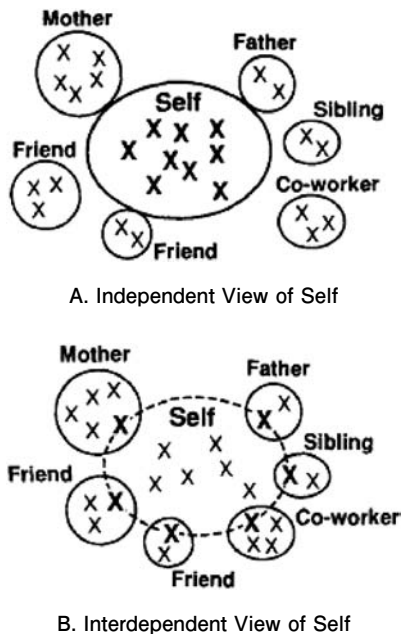


Figure 2. 相互独立的自己観と相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991)

成であり、第二のプロセスは特定の自己定義間の葛藤・調整という意味での統合形成である。人によっては自己定義間の葛藤を抱きながらも、とりたてて第二のプロセスに移行して調整せず全体のアイデンティティ形成となることもあるが、人によってはそこから第二のプロセスを加えて徐々に全体のアイデンティティが形成されることもあると述べられている。辻 (2004) が述べるような多元的アイデンティティは、第二プロセスに移行しない状態におけるアイデンティティ感覚とも捉えられるだろう。

今後のアイデンティティ研究においては、アイデンティティ形成の共通項を見出すだけではなく、多様なアイデンティティ形成のプロセスを見出していくことが重要となってくると思われる。

## 【引用文献】

- Adams, G. R.(1976). Personal identity formation: A synthesis of cognitive and ego psychology. *Adolescence*, 12, 151-164.
- 安達知郎 (2009). 自己の多面性, 変動性に関する研究の現状と課題-測定法の観点から- 東北大学教育学部研究科研究年報, 58, 1, 209-226.
- 浅野智彦 (1999). 親密性の新しい形へ 富田英典・藤田正之 (編) みんなぼっちの世界 恒星社厚生閣
- Block, J.(1961). Ego identity, role variability and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- Coleman, J., & Hendry, L. B. (1999). *The nature of adolescence*. (3th ed). London : Routledge. (コールマン, J. & ヘンドリー, L. 白井利明 (訳) (2003). 青年期の本質 ミネルヴァ書店)
- Donahue, E. M., Robins, R.W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993) . The divided self : Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 834-846.
- Dunn,T.,& Castro,A.(2012). Postmodern society and the individual : The structural characteristics of postmodern society and how they shape who we think we are. *The Social Science Journal*, 49,352-358.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977・1980). 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : W.W. Norton. (エリクソン E. H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gergen, K. J. (1991). *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. New York: Basic Books.
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to Social Construction*. London: Sage. (ガーゲン, K. J. 東村知子 (訳) (2004) : あなたへの社会構成主義, ナカニシヤ出版)
- 畑野 快 (2010) . アイデンティティ形成プロセスについての一考察-自己決定を指標として- 発達人間学論叢 31 31-38.
- 林 文俊・堀内 孝 (1997). 自己概念の複雑性に関する研究- Linville の指標をめぐって- 心理学研究, 67, 452-457.
- 岩田 考 (2006) . 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) (2006). 検証・若者の変貌-失われた10年の後に- 勁草書房 pp151-190.
- 川上華代 (2013). 現代学生の特徴と学生相談についての一考察-問題や症状が維持され, 変わらない学生の姿から見えてくるもの 和光大学現代人間学部紀要, 6, 141-153.
- 川人潤子・堀 匡・大塚泰正 (2010). 大学生の抑うつ予防のための自己複雑性介入プログラムの効果 心理学研究, 81, 140-148.
- 川人潤子・大塚泰正 (2012). 大学生の肯定的自己複雑性と満足感, 幸福感及び抑うつとの関連 パーソナリティ研究, 20, 138-140.
- Lifton, R. J. (1967). *Boundaries: Psychological man in revolution*. New York: Random House. (リフトン R. J. 外林大作 (訳) (1971). 誰が生き残るか: プロテウスの人間 誠信書房)
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity : Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Linville, P. W. (1987) . Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.
- Markus, H. R., & Kitayama, S (1991). Culture and the self-Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, 98, 224-253.
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学: 他者の森を駆け抜けて自己になる. 世界思想社.
- 水間玲子 (2006). 大学生のアイデンティティ発達における専門教育の意義について: 心理学専攻の学生

- を対象に 京都大学高等教育研究, **12**, 1-14.
- 村瀬 学 (1999). 13歳論－子どもと大人の境界線はどこにあるのか 洋泉社.
- 成田善弘 (2001). 若者の精神病理－ここ20年の特徴と変化 岩波新書.
- 小此木啓吾 (1977). モラトリアム人間の時代 中央公論 中央公論社.
- 小沢一仁 (2004). アイデンティティ危機における自分自身への違和感からアイデンティティを再考する 東京工芸大学工学部紀要, **27**(2), 79-89.
- Rafaeli-Mor, E., & Steinberg, J. (2002). Self-complexity and well-being: A review and research synthesis. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 31-58.
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の変異性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- Smith, H.S., & Cohen, L.H. (1993). Self-complexity and reactions to a relationship break up. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **12**, 367-394.
- 浜川瑠衣・松下姫歌 (2010). 大学生における自己の変動性・多面性の概念について－学生相談における臨床的理解と意義の視点から－ 広島大学心理学研究, **10**, 171-184.
- 高石恭子 (2009). 現代学生の心の育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, **15**, 79-88.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 鎌 幹八郎 (1994). 日本的自我のアモルファス構造と対人関係 広島大学教育学部紀要 (心理学), **43**, 175-181.
- 田島 司 (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関連－女子大学生を対象とした調査－ 心理学研究, **81**, 523-538.
- 辻 大介 (2004). 若者の親子・友人関係とアイデンティティ：16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から 関西大学社会学部紀要, **35**, 147-159.
- Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Alken, L. A., & Polino, M. (1995). Self-complexity, self-evaluation and depression: An examination of from and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1108-1120.